

# 南方（ボルネオ）

## 北部ボルネオ貫兵団

### 工兵として生き抜く

佐賀県 久世 童龍

大正十一（一九二二）年八月十七日に生まれた私は、旧姓名を山口利喜男といいますが、戦地から帰って伯母の家の跡を継ぎ僧籍に入ったから姓も名も変わり、住所も杵島郡有馬町大字坂田となっております。

昭和十八（一九四三）年一月十日、臨時召集で西部第五十二部隊第三中隊に入隊したのです。部隊は、支那事変で有名となった「爆弾三勇士」の出身隊、久留米の工隊であります。私は当時、測量技術を持ってい

ましたので工兵隊となつたと推測しました。久留米工兵隊は厳しくて有名であつたのですが、入隊も第二乙種だつたのに、現役の一番（昭和十八年一月）と同じでありました。

初年兵教育は三カ月間、星一つでも、一日でも早く入隊すれば先輩であり、上級者、古兵、先輩たちに毎晩叩かれる。同年兵の一人は、一人の上等兵から三カ月間に一〇〇回叩かれたと言いますが、彼は毎晩手帳に「正」の字を書いて記帳していたのでした。私は叩かれない方でしたが、一〇〇回は叩かれました。

測量技術者であっても、工兵の基本である穴掘り、足場掛け、そして大きな円匙で土を、向こうに引いてある四メートル線まで投げる。穴掘りは垂直三メートル以上投げ上げる。訓練場がそうになっている。これを

毎日やるのです。

舟艇は鉄舟を四人で担ぐ、場所は筑後川であり、舟は尖型舟二つ、方形舟二つ、この四個を継いで一艘となるが、その一つ一つを四人で担ぐが、一個は三〇〇キロだったと記憶しています。その他大発（エンジン）の運転、火薬の点火では四〇〇メートル位の所で控えている。導火線は一秒間に一メートル走る。導火線の長さは十五メートルだから十五秒で爆発する。その点火には後には点火管を使ったが、それまではマッチを使っていました。

火薬は一〇〇グラム単位、ダイナマイトの数十倍の威力がある。もし握ったままだったら、体が粉になってしまう。火を点けて地に投げ込む。爆発まで十五秒しかない。このような基本訓練を五回やりました。

初年兵は一個中隊三百二十人で、六個班に分けて教育をされました。以前は、四個中隊百五十人だったのが、私の時には、千五百人位に増えていたようです。そのため、ベッドは一人一人ではなく、所謂鰻の寝床

でした。とにかく、兵員が倍以上になったのですから。

一期検閲終了、七月十日、一等兵、十月一日、幹部候補を命ぜられ、十一月一日、乙種幹候上等兵、原隊で教育を受け、昭和十九年二月、伍長、下士官としての集合教育後、六月十九日、ボルネオ守備軍（第三十七軍―灘集団）の独立混成第五十六旅団（貫一五八九〇部隊）の工兵隊（貫一五九〇八）要員として転属を命ぜられました。

昭和十九年七月三日、門司出発、七月十九日マニラ上陸、九月三日、マニラ発（徳島丸）、九月十七日、北ボルネオ、サンタガン上陸、九月二十日、独立混成旅団工兵隊編成完結（現地召集者を含め）、九月十七日、タワオ上陸、九月二十八日―二十年八月十三日、タワオ附近の警備・戦闘、昭和二十年三月からマラリア病罹患、食糧不足、八月、任陸軍軍曹、昭和二十一年四月二十六日、復員（大阪）。

これが我が履歴の概要であります。

新編成の工兵隊長は橋本紀林大尉でありました。隊長の手記によれば、昭和十九年五月、現地徴兵検査が施行され、ボルネオ各地で戦前から、あるいは戦中活躍していた軍属や各商社員、基地の青年たちは、同年十月現地召集されて、北ボルネオの西海岸サンダカンやキナバル山（ボルネオ最高霊峰、四、一七五メートル）麓のラナウという高原の町で初年兵教育を受け、歩・銃・工に区分けされ、それぞれの各隊に配属されたということした。

ボルネオの戦況については、局地的なことしか分からない私の体験よりも、橋本隊長の手記（キナバル戦友会回想録）を読ませて頂き、多くを知ることができました。

私がタワオ上陸は昭和十九年九月十七日、九月二十八日より昭和二十年八月十三日まで同地附近の警備、戦闘と申しましたが、隊長の手記「ボルネオの大河、センボン遡航記」には「九月二十八日夕刻、待ちに待った部隊は漸く機帆船にて到着、夜遅くまでかかって荷揚げを完了し、やっと宿舎に入って、ほっと一息

ついた頃、敵機（水上機）一機の空襲を受けたのであった」と記されています。

以下手記により、同地における警備・戦闘の概要を読んでみます。

「空襲第一日は機帆船は棧橋に横付けにしたままであったが、荷揚げは終わっていたので不幸中の幸いだった。かくして我が工兵隊はタワオの警備に就いたが、陣地構築で毎日毎日息つく暇もない有様であった。

十一月中旬頃より次第に敵の空襲を受けるようになり、十一月十五日にはロッキードP 38が十二機で空襲、埠頭、飛行場等被害を受けた。

また、十一月十六日にはB 24の爆撃機が、二十余機の大編隊でタワオ上空を北へ向かって通過していった。続いて翌十七日も、同様、B 24の大編隊がタワオ上空を通過していった。

十二月十二日にはまた空襲を受けて、タワオ市街は全焼してしまった。十二月十八日にはまたまた空襲あ

り、敵機一機を岡田部隊で撃墜したのであったが、乗員一人は落下傘にて海上に逃れてしまった。工兵隊はタワオの埠頭より三メートル余り離れた久原地区の兵舎に駐屯したものであるが、現地徴集の初年兵九十余人と他に補充兵五十余人が、近く入隊する予定となっていて、現在の兵舎では手狭となるので、海岸に近い教会の建物、その他を利用して、十一月下旬頃、ここに移転したのである。

部隊は当初、二百人の編成であったが、現地徴集の初年兵九十四人が、サンダカンにおいて教育を受け、昭和十九年十月二十日付で、工兵隊に編入になり、サンダカンより行軍で十一月下旬、タワオに到着した。しかし、その十人くらいの者が部隊へ到着せぬままに、途中戦死せる者、一人、病死者及び生死不明者を出したのであった。

長い間かかって漸くできたタワオ飛行場は、敵B29の攻撃目標となつて、一度にメチャクチャに破壊されてしまい、噴火口のような大穴を、幾つも幾つも、埋

めねばならないので、それはとても大変な労力であった。

そして何日も、何日もかかって、やっと埋め終わったかと思うと、またドカン、ドカンである。本当に、たまつたものではない。タワオは、マラリア、 Dengue 熱の多い所で、患者が日増しに増えていた。

昭和十九年十月、米軍がフィリピンに上陸し、戦況は日々、我々に不利になつてつあつた。従つてボルネオは特に北海岸方面が敵の脅威を受ける状況になつてつあつた。

昭和二十年元旦、私達はタビオカで餅を搗いて、心ばかりの正月を迎えた。一月六日、我が貫兵団参謀の武田中佐が、アピー上空で強烈な戦死を遂げられた。

私は、あれほど信頼し、親しくしていただいた武田中佐が戦死されたとは信じたくなかつたが、どうすることもできない事実であつた。

貫兵団は、昭和二十年一月下旬、戦況の変化に伴いブルネイ方面へ転進命令が下達された。これぞ筆舌に尽くし難い、あの悲惨極まる多大の犠牲者を出した、

所謂ボルネオの密林における死の行軍となったのである。

ブルネイの転進行程は、タワオより東海岸のモステン、ラハダッドを経てコヤ川、ハムラット、ラナウ、ケニンゴ（第二兵站線）に出て、メララップ、テノム、ウエストンから海上をブルネイへ行く、延々六、七百キロの行程である。特にラハダットよりラナウ間は大密林地帯で難関地帯であった。

その戦陣をきって第三六七大隊（岡田隊）が、転進の第一步を、我工兵隊は「貫兵团命令」に基づき、後川春雄大尉（当時中尉）、上田中尉、西川久良中尉の指揮する、三個小隊を二月下旬頃、ブルネイに向け出発した。

当時マラリア患者が続発して困っていた。マラリアによる戦死死者は昭和二十年一月中、三人、二月中一人、三月中七人も出したが、これで上陸以来、十五柱の英霊を出し、誠に悲しい極みであった。部隊では近くの林の中に墓地を作り丁寧に墓標を建てお祈りをした。

病室は患者がいつも満員で、まったく手のほどこない有様であった。従って患者や病弱者はとも転進出来ないで、柴田少尉以下百二十人をタワオに残留することにして、行軍に耐えられる強健者のみをもって部隊を編成したが、多少調子が悪い者でも残留したいという者は一人も無かった。

その時、能崎兵团長は中将に栄進のため内地に転出、新兵団長に赤石泰二郎少将が着任することになっていた。

出発命令が出ていよいよ四月一日午後十時、タワオ埠頭出発と決まり船は一五〇トンの機帆船一隻で、各隊十五人宛合計七十五人が先遣隊となり、橋本隊長が混成隊の隊長となった。暗い海上、魚雷を一発くらったら、例え爆薬を積んでいなくても、それこそ一発で吹き飛んでしまう、という危険な前途であった。

その後、五月十八日夕、実に四十八日間かかった長途航海であったがシンガダルへ着いたのである。しかし密林縦断部隊は悲惨極まりない行軍をしたのであった。私は今更返らぬ繰り言ながら、軍は敵情がこ

うなることは一早く察知していたはずであるから、タワオ、ラハダット、ラナウ、ケニンゴー間の第二兵站線をもっと早く計画し完備すべきであったと思う。兵站線さえ今少し早く確立されていたら、あれほどの悲劇は起こらなかつたのではなかつたかと、悔やまれてならない。(戦没者四千六百七人うち戦病者多数)

ポーホート附近の戦闘から終戦まで

私達はケニンゴーに到着したが、息つく暇なくまた前進せねばならなかつた。空襲は段々と敵しくなり、一日数回機銃掃射を受ける。六月十四日、「敵が六月十二日ラブアン島へ一個師団上陸した」との情報が入つたので、私は早く前進せねばならぬと思い、六月十五日早朝、テテムを出発し、サボンに至り、第三十七軍司令部に出頭し、馬場司令官に、工兵隊長到着を申告したので、閣下は非常に喜ばれ、敵が上陸したから、一刻も早く、ポーホートに行つて、ポーホート防衛隊長の指揮下に入るよう命令を受けた。閣下は昭和二十二年八月七日、戦犯として刑死され、ご冥福を祈

るのみであつた。

我が工兵隊は、防衛第一線についたが、参加できた者は三十七人に過ぎなかつた。将校は私人のみ、敵は既にウエストン方面に上陸し、我が軍に接触しつゝあつた。しかも、ブルネイ方面の状況はまったく不明であつたが、当時、既に激戦が展開されていたはずであつた。我が兵力は既に三分の一以下になっているかと想像していた。

タワオに残置した百二十人の将兵たちが元気で一緒にここまで来ていてくれたらなあ、とできもしない事を思つたりして、私はこの時くらい悔しいと思つたことはなかつた。

しかし、敵は目前に迫っている。持てる力で総力を挙げて突進するだけだと覚悟を決めると不思議に勇氣が湧いてきた。

工兵隊は防衛隊長の命により陣地構築に協力して作業に追われ多忙を極めていたが、その間、敵の砲撃は日増しに激しくなつてきた。六月二十六日、敵は遂にバタス河を遡航し、ポーホートに進出してきた。

いよいよ戦闘開始。敵の砲撃が物凄くなってきたかと思うと、間もなく敵は勇敢にも我が敵地正面に向かって接近し、激しい攻撃を加えてきた。我が方は一斉にこれに反撃して銃撃を加えたのであった。彼らの物凄い銃撃戦の音は山野に飴して、耳を聾せんばかりであった。

この戦闘で工兵隊は予備隊となり待機していたが、私は小高い丘の大隊本部の近くで戦況をつぶさに見ている。敵が自動小銃を立ち撃ちの姿勢で撃ちまくっているのが手に取るように見えたので、敵にもなかなか勇敢な奴がいると思った。

しかし、敵は余り積極的に攻撃はせず、いつの間にか、潮が引くように後退し、何事も無かったように辺りはまた元の静けさに戻った。しかしその静けさも長くは続かず、敵は砲撃を開始し、我が陣日がけ物凄く砲弾を浴びてきた。敵は我が陣地をよく偵察していた。弾着は実に正確であった。敵は飛行機で弾着点を修正しながら砲撃するので、どうにも始末におえないものであった。

翌二十七日もまた、同じような戦闘の繰り返しで、敵の砲撃はますます激烈となり、これにはわが勇士たちも、手も足も出ず、ほとほと弱ったのである。この時、防衛隊には一門の砲もなかった。シガダルに残しておいた山砲一門でもあったらと悔やまれて仕方なかった。

木村防衛隊長から工兵隊で敵の砲陣地を爆破してくれとの要請があったので、私は直ちにこれに応じて、中山武丸曹長以下八人の斬込隊を編成して、二十七日の日没後出発した。しかし残念ながら、斬り込みの途中、敵と遭遇して中山曹長以下七人は戦死し、一人が辛うじて生還という失敗に終わってしまった。

二十八日も激戦が続き、敵は執拗に攻撃を繰り返し、砲撃は相変わらず激烈を極めた。この日の戦闘で、誠に残念ながら木村防衛隊長が早くも左腕に重傷を負われ後退を余儀なくされた。代わって、独混第二十五連隊、大河内第一大隊長が防衛隊長となる。

二十八日夜、防衛隊は多少陣地を後退したので、工兵隊もこれに伴い、シンパンガン駅（五十七里地点）

の東側高地の予備陣地に就いた。敵の砲撃は相変わらず続いた。間断無く集中砲火を浴びせてくるのである。我が予備陣地附近にも物凄く砲弾が落下。六月二十九日、防衛隊は約四里後方の六十一地点に後退し、同地附近の高地を占領して死守せよとの軍命令を受けた。

そこで工兵隊は部隊のボーホート撤退に当たり、護衛となり、全部隊の撤退終了後、二十九日夜、十二時を期してボーホートを撤退すべしとの命令を受けた。その夜ボーホート部隊は撤退したので私達は全部隊の撤退完了を見届けてから、十二時を期して、極く隠密裡にボーホートを撤退し六一哩地点に後退して配備についた。

今まで予備隊だった工兵隊は今度は第一線陣地の守備に就いたのだが、配属の兵員も合わせても、百人足らずであった。

砲兵中隊長の大浦中尉は工兵隊配属となり第一小隊長を務めてもらった。工兵・砲兵・通信、その他の特科隊はそれぞれの特種の技術部隊でありながら、当時

の状況下、特別の状況を除いて、皆一様に銃を執って第一線に立たねばならぬような状況であったから、我が工兵隊も歩兵同様、第一線の守備に就いた。

面白いことに、我々がボーホートを撤退したのに、約一週間くらい、敵は気付かず、我が元の陣地に砲撃を続けていたのであった。敵機が飛来し始め、機銃掃射を受けたが、暫くするといよいよ砲撃が始まる。それこそ天地も轟く砲弾の雨を集中的に浴びてきた。それも一日中断続的に何回となく反復し撃ってくる。

この砲撃が毎日続くので、これには我が勇士たちもいささか辟易せざるを得なかった。この砲撃はおよそ一日一万発を撃っているだろうと言われていたが、我が陣地附近の樹木が完全なものほとんど残っていないまでに叩かれていたのを見ても、いかに砲撃が物凄かったかが分かるのである。

その後のことになるが、停戦後、私達が収容所に入った時、豪州軍の将校が日本軍はよくもこんなままで頑張ったものだ、驚いたり感心したりしていた。

八月四日頃、後川大尉、西川中尉、上田中尉以下四

十人が半年ぶり、日焼けした元気な顔と会うことができ、この時ばかりは手を取り合って喜びあった。(ブルネイ方面へ行っていた貫兵団が後退してきて、我が工兵隊主力が本隊へ復帰した)

それから十余日後の昭和二十年八月十五日、停戦命令が出たのを我々は知らなかった。今まで毎日毎日物凄いい砲撃に明け暮れていたが、十五日から砲撃が止み敵機がきても上空を旋回するだけ、銃撃もしない。何か様子が変わだと思っていた。そんな不審な日が続いて、八月十九日に至り、私達は停戦の命を受けて驚いたのである」。

橋本紀林元工兵隊長の手記、『キナバル回想録』(ボルネオの大河、センバコン通航記)は、四六二ページの大作であるが、ここに『貫兵団工兵隊史』として抜粋掲載したことを了承ください。

ボルネオは中文にもあります如く、マラリア病の多い所であります。マラリア病には三日熱とか四日熱と

か熱帯熱とかがあり、熱が連続する悪性の熱帯熱に罹病しました。体熱が四二度にもなり、数日間連続する。体温計の最高四二度に上がりつばなしで下りない。そんな高熱が続いて死んだ者がたくさんいる。というより、私は衛生兵からも死ぬのではないかと思われていました。

私は戦後帰国結婚しましたが、家内は一人の子も産んでいない。私の高熱の連続のため子供は授からなかったのではないかと推測しています。

マラリア特效薬のキニーネを飲みすぎると黒水病になるときいたことがあります。我々の仲間の多くは、ボルネオでマラリア罹患、多くの人が死にました。戦死は少なく、マラリアによる戦病死が多いのでした。

ボルネオで特に我が独立混成第五十六旅団(貫兵団)の総員七、六一七人、帰還者二、五八六人、戦没者四、六〇七人があります。我が工兵隊は、総人員二八〇人転属者四人、帰還者一〇七人、戦没者一六九人です。六〇%以上が死亡しているのであります。

す。私の中隊では一八一人中復員したのは三五人でした。

私は昭和二十一年四月二十五日、復員船は生き残りの空母「葛城」に乗り大竹港に上陸、復員しましたが、栄養失調のため四〇キロ位に痩せ細って帰り、回復するまで一年以上かかりました。ボルネオでは、昭和二十年三月から、食糧は飯盒の掛盒（副食を入れる深さ二センチ程度の中蓋に、米三杯が十五人の一食分でした。補食はタピオカ、副食は、ワラビとカンコンという雑草の汁で、トカゲ、錦蛇、川魚等手当たり次第、米は重湯にもならぬぐらい、米粒が少ない。塩分は海水を炊き作る。ドラム缶を縦に割り、海水を入れて炊き、塩を取るのである。

終戦は、玉音放送を短波で受け、各出先の軍隊に知らせるため、伝令が我々の部隊にも数日後来ました。

私は、山の中に逃げて戦いを続けようと思いましたが、内地の人が敵の人質になってはと思い、思い止まりました。

復員後は伯母の家の跡を継ぎ僧侶となりました。僧となる修業は相当厳しいものですが、軍隊の初年兵の教育、戦闘参加を思えばと耐えて勉強し、僧侶になることが出来現在に至っています。

### 【解説】

北ボルネオ作戦参加部隊人員及戦没者数

部隊名 総人員 戦没者数

1 第三十七軍司令部 二、六六五 八三九

独立混成第二十五連隊、独立歩兵第四三二・

五五三・五五四・七七三大隊、ほか

計 一、二七一 四、五六九

2 独立混成第五十六旅団

司令部、独歩第三六六・三六七・三六八・

三六九・三七〇・三七一大隊、同砲兵隊

同工兵隊、同通信隊

総人員 七、六一七

転属者 四二・五

帰還人員 二、五八五 四、六〇七

3 独立混成第七十一旅団

総人員 一、二三二

転属者 一一〇

帰還人員 一、一〇七

一五

4 航空関係・船舶関係部隊

総人員 八、〇四七

転属者 七一四

帰還人員 六、二八七

一、〇四六

5 海軍部隊

総人員 三一二

三一二

合計 総人員 二九、九一九

転属者 一、七二七

帰還人員 一七、六四三

一〇、五四九

(三五・二六%)

第三十七軍司令部(灘第九八〇一部隊)

隷下の各部隊は、ほとんどの部隊編成は昭和十九年以降であり、短期間に北部ボルネオ地区に配属され、極めて困難な状況下、連合軍と戦闘を交え、四〇%近

い兵員が戦没した。知られることの少ない激戦地、特に激しい環境との戦いであった。

その最たる犠牲が、独立混成第五十六旅団(貫兵団)であり、聞き取り対象者である久世童龍氏のご苦勞は察するに余りあるものであります。(解説者)